「神様が来た」と

２００７年１月１５日。私は愛弟子の北タイ高地民族のアカ族のリーダーのヨハン君のピックアップトラックで、東南アジア第一の大河、メコン河をタイのチュンコーンより向こう岸のラオスの町へ渡った。国連が世界最貧国の一つにランクづけているこの国の農村開発に取り組んでみたいという私の新しいプロジェクトの第一回目の旅である。同行するのは、ヨハン君と同じアカ族の友人の２人とモン族のこれも私の愛弟子のポンパン君と私の一行５名の三泊四日の旅である。ラオスのこのタイの隣り県のエーリアには、アカ族とモン族の集落が多く、ヨハン君も何回か訪ねた事が有り、知人も居るので、ラオスの最初の開発プロジェクトのエーリアに此の地を選んだ訳で有る。

今日は、プロジェクトの事は後でゆっくり報告する事にして、先ず此の旅の２日目に起きたある事件を皆様にお聞かせしたい。その話は結局は私がラオスを開発したいと思うその理念の一つの大きい理由と結びつくからである。

一日目の１月１５日は朝早く吾家を出発したが、国境になっているメコン河を渡ることで、両国のイミグレーション等で多くの時間を取り、夕方遅く途中の田舎町の安宿で一泊し、翌朝その町の市場の中に有る薄汚い食堂でラーメンで朝食を取り、８時過ぎ北の方へ向かって出発。約４０分して国道沿いにあるアカ族５０戸程の部落に立ち寄る。

ヨハン君はこの部落の貧困の度合い、子供達が何を欲しがっているかという事を十分承知しているので、タイを出るとき駄菓子屋より米のオコシを沢山買ってきて村の広場でその包みを開けると、忽ち子供達がワンサと集まり、同行の青年がその交通整理に当たらねばならない賑わい。その列の中には背中に子供を負んぶした若い婦人も何人か並ぶ。１０分程でその包みは空になった。その時そこに、部落の区長然たる人物が来て、「病人が居るから見てくれ」という。その人について行くと、物置小屋然たる５～６畳敷き程の広さの一部屋きりの床と壁は竹､屋根は萱葺きの家に１５～６才位の娘が太股の付根が潰瘍で黄色く膿んだ右足を、毛布から投げ出して横になっている。母親が、足の傷が元でもう２ヶ月程になるが、病状は悪くなるばかりでもう歩く事も出来なくなった。と顔を曇らせて云う。父親は、この末娘が生まれて間もなく死亡したので、６人の子供を母の手一つで、ほんの少しばかりの痩せ地の傾斜の焼畑で極貧の中で生きており、医者の居る町までは１時間ぐらいもかかり、第一、医者にかかる金など有る筈も無いので、此のままに２ヶ月経ち病勢は進むが打つ手はなし。そして手遅れになれば片足切断ということになるのでは、と村人達が云っていると…。部落中が貧困の極みで、周囲からも親戚からも助けてもらえないのだという。「薬を買う金、医者にかかる金も無い、周囲からも助けられない」これでは自然の動物が、事故で身体を傷め自然に治るのを待つか、或いは死を迎えるの他は無いのと同じではないか。「貧乏人は死ね」ということである。今日の日本にこの様な事が有るだろうか。信じられない様な話であろう。もうガタガタ論議する余地も時間も無いし、それも不要！！私は自分の貧しい、薄い財布から１,０００バーツ(３,０００円)を抜き“今日にでも病院へ連れて行きなさいよ。”と伏して拝む母親の手に握らせる。処が、その家を出ようとすると、外に若い母親が、下半身裸の男の赤ん坊を抱いている。この子も、ここの娘と同じ足の付け根に潰瘍のカサブタが出来ている。ヨハン君と相談して、この母親にも５００バーツ握らせる。すると区長が「もう一人居るから見て呉れ」という。５～６軒先の、これも小屋然たる竹の家に案内する。５０過ぎの初老の農夫が、左足に比べて小さい右足をさすりながら、何か訴えている。何が原因か知らないが、左右不均衡の足の治療は、生半可な時間と金では解決出来るものではあるまいと思うが、一生懸命に哀願している顔を見ると、私は“我関せずえん”とその場を去り得ず、傍に寄って座って、その老人の足をさすってやりながら、ヨハン君と話し合い、“早く医者に行きなさい”と、この老人にも１,０００バーツを与える。この日及び次の日は、目的地のラオスの山深い地に生きる高地民族、アカ族の部落をヨハン君のスケジュールに従って、そこの農村の実態を泊まりがけで、夜は村人を集めて話し合いを持ったが、開発とか発展とかという言葉のかけらも無い様な、昔乍らの先祖伝来の焼畑農業主体での生き様を続けて、新しいテクニックへのアプローチなど一かけらも無い農業指導態勢の中で生きてる事を見聞した。

かくして吾々は、奥地のアカ族の村に２泊して帰路につき、再び上記した部落に立ち寄り、例の娘のその後を訪ねてみた。ところが、その母親は約束を果たしていなかった。一番近い町の病院まで小１時間もかかるその車代や、母親が娘の看病に行っている間の家族の食事の世話を誰がするか等の事で、まだ実行に移していなかったのである。それを聞いた、タイから同行したヨハン君の友人達は、バタバタバターと娘をヨハンの車の荷台に敷物のマットと共に乗せ、母親に有無も云う暇も与えず、自炊用具を台所より車に乗せ、母

親もせきたてて乗せてサッサッと病院へ運んで行った。そして私は、取り残されてそこで待つより他なかった。
約２時間して帰って来たヨハンが「医者が２週間以内に退院させます。２,５００バーツ(７,５００円)有ればよい」と言うので頼んで入院させて来ました！という。これで此の娘は片足を切断せずに生きられるだろう、ということである。その病院は、私達がタイへ帰る道筋に建っているので、ヨハンが私をそこへ案内した。大部屋の病室に、他の患者と一緒にベッドに横たわっている娘を見舞うと、今までの憂いに満ちていたその顔が、希望と安心感を湛えた顔に変わっている。“後２週間精一杯養生しなさいよ。”と私はヨハンの通訳によって彼女を励まして廊下に出、会計の窓口で経費を払い終えると、私の足元に、その母親が草履を後ろに脱いで、私の靴の上に両手を重ね、三拝して頭を手につけて、最大級の尊敬の礼で以て感謝の意を表現した。(この謝礼の仕方はタイでも同様で仏教の国の習慣で有ろうか)私はかがんで、その肩に手をあてて答えた。
　私はここで支援者の皆様にお許しを頂かねばなりません。今回のこの部落での３人の病人の為に１５,０００円を使いました。その金は、当然の如く私の懐から出ました。そうしなければこの３人は救われない、と私は思ったので出しました。そしてその金は日本の支援の人々のご芳志で私のタイでのプロジェクトの為にと拝領したものです。直接に農業開発と関係がない方面への金の支払いで有りますが、支援者の皆様、あなた様も含めて、きっと私のこの処置をお許し下さるだろうと信じて、人助けの為に投資しました。お許し下さい。
　貧困な親が、金が無い為に子供の片足を切断して以後の人生を、ズーツとちんばになって生かざるを得ないと云う事になれば、その子は自分で働いて生きる道も狭く、結婚も出来ないだろうし、、一生涯大きいマイナスのプレッシャーに苦しみながら、泣きながら生きねばならないだろう。その場合、親はその子が死ぬまで、否！年上の母親が(早く)死ぬまでその子のちんばの生活を見続けねばならない。そうなれば、親も子もその不幸を嘆き、神を呪う事になるかもしれない。
ところが、それが、今此処に救い主が現れたということである。思わぬハプニングに時間を取られ、今日中にタイの吾が家に帰らねばならない焦りから、最近の東南アジアを襲っている大旱魃の為に、たまには５ｍの先の見えない黄塵万丈のガタガタ道をメコン河を目指して突っ走る、その車の中でヨハン君が言った。「三日前にも、そして今日も村人達が『神様が来た』と言い合って先生の援助を感謝していました」と。「嗚呼(アァー)!! 何と胸の痛む哀れな話である事か。」と私がこの熱心なクリスチャンの４２才の愛弟子に返した第一声であった。私が助けた３人の病を持った人々が、もし私が出現しなかったら、今日よりもより悪い方へ進む事は確実であろう。結局私は、合計５,０００バーツ＝１５,０００円を援助した事になるが、今の日本人なら２～３日分の労働賃金の額であろう。タイの田舎で、人様の支援によってプロジェクトを実施している私にとっても、決して小さい金ではないが、ラオスの山深い所に焼畑で生きる人々にとっては「神様しか作れない金額」であるという事であろう。
「貧乏人なら早く死ね、金が無いなら片輪になれ」。それは２１世紀の人類社会には通らぬ話である。処がそれがまかり通っている社会がまだあるのである。私が今居る所はその様な所である。吾々は人間ならば、より豊かな人々はより貧しい人々っを援助すべきである。吾々は今、「地球は一つの家族」であるという意識を強く認識すべきである。世界には国連がある。FAO、WHO、WTO が有る。ヨーロッパの２７余ヶ国は EU という政治形態を作り、互いの関税を撤廃し、通貨もユーロダラーで統一。何れは一つの国になりたい、という理想の下に前進しつつあるのではないか。それに比べて、アジアのモンゴロイド圏の「兄弟垣にせめぐ」的様相の今日の姿は、世界史の中世紀の人類社会のレベルから一歩も脱皮してないではないか。“日本の若者よ”これでよいのか？